密葬　-mitsuso-

新オカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
密葬　－ｍｉｔｓｕｓｏ－

【Ｎコード】
Ｎ４８１３Ｖ

【作者名】
新オカ

【あらすじ】
舞台は並行世界の日本・京都。謎を抱える小さな盗賊一味の頭と、光を失った片目の少女は、とある雷鳴とどろき豪雨やまらぬ夜、「羅城門」の闇の中で、出会う――――

第一夜・孤独

「・・・いいか、少し待っていろ。絶対に動くな」

そう念を押すと、まだ幼さの残る男は一人、表の華やかさが感じられぬ質素な階段を覆う闇へと足を踏み入れた。

仲間の前では平気なふりをしていても、一人になれば心臓は五月蠅く跳ねる。

（くそ、くそ、くそ）

心の内で今日の不手際を招いた天候に悪態をつきながら、一歩一歩、ゆっくりと軋む階段を上っていく。

こうなったのも、豪雨が続き、足場がぬかるみ、雷鳴がとどろいたが故だ。そのために一味は、米問屋の屋根より足を滑らせ、屈強な雇われ用心棒から命からがら逃げてこねばならない羽目になったのだ。

ギシリ、

ドクリ。

――ああ、もうすぐだ

下にいてもひどく鼻をついた腐臭が、いっそう激しくなっている。何度も、何度も、昔嗅いだ臭いだ。

ミシリ。

「・・・っ」

その足が、腐臭の根源近くへとおそらく辿り着いたとき、無意識のうちに逃亡を図ろうとしたのは言うまでもない。

（見たくない、見たくない、見たくない）

――でも、俺は頭（かしら）だ

その言葉で自信の弱音を叱咤し、何とか押さえつけ、ぎゅうと瞑った目を、そろりと開けると、そこには

「・・・っ！」

部屋の広さすらはかれないほどの闇の中。
階段から五歩ほど離れた場所に、男の腐りかけた肢体と、微動だにしないやせこけた少女の白い肌だけが、ぽつりとその存在を示していた。

（なんだあ、こりゃあ）
一瞬、少女の父親が腐りかけた男かという考えも浮かんだが、そうではないと本能が遮った。
この三日三晩の雨で、死体の腐食する速さは加速しているだろうから、腐りかけているとは言っても、おそらく五日前がいいところだろう。
死体には既に蛆がたかり、周辺を五月蠅くハエが旋回している。むっとする腐臭が鼻を鋭くつき続けるのはしようがないとして、あの少女は何をしているのだ。
呼吸をしているのかすらあやしいほど彼女は動きをやめ、ただひたすら倒れた男を見ている。悲しんでいる様子も、悼んでいる様子もない。見ている。
（・・・オイオイ）
たとえようもない寒気が背筋を襲い、自身の心の弱い部分が足を竦ませるが、此処で引き下がるわけにはいかない。俺は、頭なのだから。
「・・・おい、嬢ちゃん」
「・・・。」
聞こえていないのか、聞こえていないふりをしているのか、はたまた聞く気がないのか。真意のつかめない光を失った瞳に、じわり、冷たい汗が首筋を伝う。
「・・・おい！」

がしり、と腕をつかみあげ、勢いのまま、彼女を乱暴に立ち上がらせる。抵抗する気配はない。ただ、ふらりと力の加えられるがままにか細い二本の足が、床を踏む。
攻撃する気力すらないというその様子に、小さな安堵と、えもいわれぬ不安が胸を襲った。
ここでこの少女が死ねば、必ずその矛先は我が盗賊一味に向くだろう。一味の中にはまだ小さい赤ん坊を抱えている者、ひと月前に美しい妻を迎えた者、病の母を看病している者もいる。その者たちがお縄かかれば、残された家族はどうする？――――飢えて死ねと申せば、それは鬼の所業であろう。
「ここで、何をしてんだ」
そこで少女は、初めて動きを見せた。瞬きを三度して、ゆっくりと一つ、呼吸を落として
「シラフジがしんだの」
と、ただ、言った。
その言葉に抑揚はなく、先程同様、感情がないというのが一番しっくりくるほど。
彼女には、人間らしさがなかった。
（・・・まさか、噂の小鬼じゃないだろうな）
ここ羅城門周辺では、小鬼がたびたび悪さを働くという噂がある。そもそも、その「小鬼」が働く悪事は、だいたいこの盗賊一味の行うそれと疑似していたが。
しかしその根も葉もない噂を信じてしまうほど、この少女は人間ではない何かのような気がしてならなかった。
「・・・シラフジって、このオッサンか」
「うん」
二文字程度に感情も抑揚もクソもない。そのまま受け流し、横たわる男を見た。
六尺はあろうかと思われる身長に、ふり乱れた髪には緩くまげを結っていたのであろう独特の名残がある。無精ひげは胸元まで伸び、

窪んだ目はかたく閉じられていた。
「シラフジ、わたしをたすけてくれたから」
二文字以上の言葉を喋らないでくれ、と心の中で叫びながら今度は少女に視線を向ける。
自分より頭一つ半ほど小さい背丈。黒い髪は無造作に腰まで伸び、右目に包帯を巻いている。大布に首と手のでる穴を開けて被っているようなつくりの服は薄汚れていて、そこからのびる肢体はか細く、長い。着飾れば、きっとそれなりに美しい少女なのだろう。
「あなたはだれ」
不躾な視線を少女に向けていた俺は不意を突いた質問に必要以上の驚きを披露し、また瞬きを三つして「シラフジ」に見入っている少女のとなりで、その質問をゆっくりと租借した。彼女の言葉は、俺に恐怖心と居心地の悪さを覚えさせる。
「・・・みりゃわかるだろ。通りすがりの青年だよ」
「このもんのにかいをとおりすがるなんてふうがわり」
「そういうあんたは？」
「・・・。」
ピクリ。
そこで初めて少女は、「シラフジ」を見ることをやめた。三つの瞬きもやめた。わずかな布の動きで、かろうで呼吸をしていることだけは確認できた。
そして、問題は次の瞬間だった。
「・・・っ！？」
「わたし、わからない」
心臓が早鐘を打つ。少女の左目が、初めて「シラフジ」以外を映す。少女の左目に移った自分は、きっと情けない顔をしている。
（だって）、その瞳があまりに闇とは違う色をしていたから。
「たすけて」

俺は馬鹿正直に、惹き込まれてしまったんだ。

第二夜・月

目が覚めた時、少女は窓枠に身体を埋め、月を眺めていた。
腐りかけた男を門からすぐの道ばたで弔うことを許した少女は、盗賊一味がその作業をこなしていくのを、ただ淡々と見ていた。
三日三晩の雨は降り止み、夜空には月が出ていた。幾分薄れたものの未だ漂う腐臭は、昨夜からの失態と豪雨と埋葬と小さな葬式に追われ、ようやく深い眠りに落ちている者どもには、何の影響もないようだ。
「・・・あなたのなまえ、わたししらない」
気配に気づいたのか、少女は月を眺めたまま問う。あなた、という曖昧な表現だったが、それが自分に向けられているものだとすぐにわかった。
「既望（すでう）。既に望むとかいて、すでう」
「いいなまえだ」
うん、と一つ月を眺めたまま頷いて、窓枠から軽い音を立てて少女は降り立った。そのままとてとてとこちらへ向かってくる様は愛らしさを含んでいる。
「すでう」
目の前までぴたりと止まると、横たわったまま少女を見上げている俺とは反対に、少女は立ったまま俺を見下げる。
そして、再び瞬きを三度して、
「わたしもなまえがほしい」
と、言った。
男を埋葬したあと、彼女に少しの人間らしさが垣間見えた気がする。声に少女の幼さが混じり、じいっと見ていなければわからない

ほどだが、表情も変化するようになった。
今思えば、どうして見ず知らずの感情を持たぬ少女に、関わっているのか。此処を新しい根城にするのならば、さっさと追い出せばよかったのでは？
しかし、それは風に吹かれれば飛んでいく塵程度の重みであり、自分の尊厳を守る上っ面だけの考えに過ぎないと深層心理は知っている。
何故かはわからない。ただ、彼女に惹かれたのだ。
彼女はそれなりに美しいかもしれない。しかし、それとは違う。どう言えばいいのか。彼女の瞳の闇とはあまりに違う漆黒に、囚われた・・・という表現で結論づければ、俺は盗賊をやめて詩人になった方がいいだろう。

「すでう」
もう一度呼ばれたその名に、意識を今へと戻す。
「名前が欲しいのか？」
「うん」
何かを見計らい、またとてとてと歩いて窓枠へ身を埋める少女のあとをゆっくりと追い、同じ窓から外を見る。
「・・・十六夜」
「じゅうろくや」
ぽつりとつぶやいたそれを彼女は繰り返す。
「十六夜（いざよい）、なんてどうだ」

満月の次の夜に現れるそれは、満月よりも月の出が少し遅いため、「躊躇っている、いざよっている」ように見えることから「十六夜（いざよい）」と呼ばれるようになった。なお、動詞の「いざよう」が名詞となった形が「十六夜」である。また、十六夜には別名があり、それを既（き）望（ぼう）という。

「いざよい」
ぽつり、ぽつり。空にぼんやりと輝くそれと同じ名を、何度も、何度も少女は繰り返し、不意に俺に向き直った。
「きにいった」
十六夜の明かりに照らされて。初めて見せた、少女の緩い笑みは。
俺の心臓を五月蠅くさせるのに、十分すぎるほどだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4813v/

密葬　-mitsuso-

2011年10月9日13時26分発行